

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

## No.388



2004 MAR



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

# 2004年HAJサマー・キャンプ隊員募集

## カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

### 記

1. 期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

## チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

### 記

1. 期間：2004年7月22日～8月27日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

## 表紙写真

野沢井家の家族とヒムルン・ヒマールを見るべくマウンテンフライトすると、眼下にネムジュンが見え、ヒムルン・ヒマールは蔭となって見ることはできなかったが、ラトナチュリ(7,035m)と遠くチベットのルンポ・カンリ(7,095m)を見ることができた。

(文・写真：今井裕隆)

## ヒマラヤ No. 388

1. ヒムルン・ヒマール(7,126m)登山と事故の記録 バーバリアンクラブ
11. ヌプツェ東峰(7,804m)初登頂
12. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス〉
13. 日本人八千メートル峰登頂者 生年月日別リスト
24. 事務局日誌

# ヒムルン・ヒマール(7,126m) 登山と事故の記録

## バーバリアンクラブ

### 登山隊の概要

#### 1. 隊の名称

チーム・ペリヒマール2003

#### 2. 主催

バーバリアンクラブ

#### 3. 目的

- ヒムルンヒマール(7,126m)の登頂
- ペリヒマールのトレッキングを楽しむ
- 環境保持の実践

#### 4. 登山期間

2003年9月5日～10月31日

#### 5. 登山結果

10月2日、正午頃ヒムルン・ヒマール北西稜約6,000m付近を登高中、雪崩により野沢井隊長が死亡し、登山は断念した。

隊長の遺体は4日ベースキャンプに収容、6日ヘリコプターでカトマンズに戻り、13日スワヤンプナートで葬儀、荼毘に付した。

#### 6. 隊の構成

- 隊長 野沢井 歩 (39) 神奈川  
 隊員 今井 裕隆 (44) 山口  
       川原 庸照 (30) 岡山  
 支援隊員 今村 文子 (44) 山口  
 リエゾン・オフィサー  
 サーダー ダヤン・バハドール・ライ  
           (通称 ディビ)  
 コック ハリ・バハドール・チャウガイ  
           (通称 アントレ)  
 ローカルキッチン  
       ○ アナンタ・ハウ・ライ  
       ○ マン・バハドール・グルン

### BCを目指して

9月9日〈カトマンズーベシサハール〉

朝5時半に宿を出てコスモに着くとバスには既

に荷物が積まれており、ポーター26人、スタッフ4人、メンバー4人が乗りこむと6時には出発した。

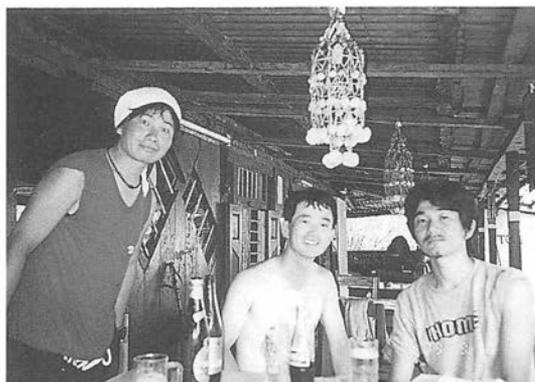
マオイストが活動を再開した為、検問が厳しく渋滞でなかなか街から出られない。車の窓から何度か子供達が鐘や太鼓を鳴らしながら行進して行くのを見る。この日はお祭り。

やっと走り始めたのも束の間、初めの峠を越えた辺りで再び渋滞。その内、完全に止まってしまう、皆車から降りて様子を見に行く始末。銃を持った軍服の人たちが通り、パンパンという音がした後、バスは走り出す。お祭り、ゼネストがらみのマオイストの活動に対し軍の出動があったらしい。

それでも12時には以前にも昼食をとった事のあるムグリンの食堂に到着した。

昼食後はドゥムレでポカラ方面への道と分れて北上。午前中の好天とは違って外は土砂降りの雨になった。隊長の話によると、この道は7年前はかなり道路事情が悪かったそうだが、今回は随分改善されたらしく午後3時過ぎにはベシサハールに到着できた。

町の入口の検問所では現地の人には結構厳しいチェックがあるようだったが、チャーターバスに乗ったままの隊員は素通り。そう言えば途中の検



▲左から野沢井、今村、川原（ブルブレにて）

問もチャーターバスは乗合バスが調べられている横をするすると先に行けた。

ベシサハールは大きな町で、アンナプルナトレックの出発地。食堂のメニューは欧米人向けで値段も立派。

夜は道で犬が激しく吠えていて恐ろしかった。スタッフやポーターには軍の調べが入ったようだ。

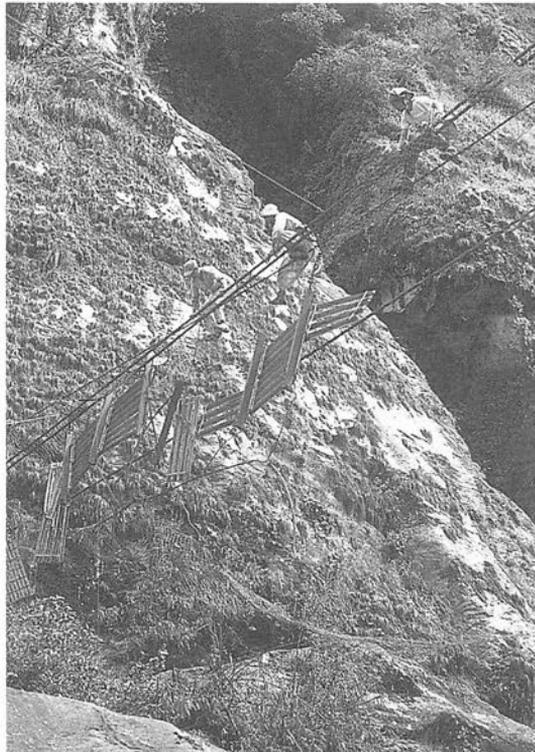
#### 9月10日〈ベシサハールンガッティ〉

朝はモーニングティーとチベットパンブレッド。いよいよキャラバンが始まる。7時過ぎ宿を発つ。ポーター達はとっくに出発していた。

河原に降りて徒歩するともう車の来ないトレッキング道。昨日の土砂降りはどこへやらの好天。大きな吊橋を渡るとクディ、少し歩くと山と白い雲の隙間にヒマルチュリが顔を出した。マルシャンディ川に架かる橋を渡ると左岸のブルブレ。まだ10時前だったがここで昼食。むし暑く汗だくになっていたので皆おいしそうにビールを飲んでた。川辺のベランダは風がとても心地よかった。

昼食後はわらびを採りながら1時間程で宿泊地ンガッティに着いた。

宿はきれいな蚊帳も吊ってあり充分清潔そう。南京虫の話聞いていて、とても恐れていたが、



▲チャムゼでマルシャンディに掛る壊れた橋

心配なさそうだった。

到着後は、UNOに興じたり、スタッフの作る鳥肝のつまみを食べたり。夕食は日本風チキンカレー、おかずには本日採集のわらびやゴーヤ炒め、きゅうりのピリ辛ごまあえ等大御馳走。めちゃくちゃ楽しいキャラバン初日であった。夕方から雨。

#### 9月11日〈ンガッティージャガット〉

7時、宿を出るとすぐ登り坂が始まり、やっぱり楽しいキャラバンはないと思う。前日同様、雨は朝になるとすっかり上がって夏休みの思い起こす様な青い空と白い雲。大汗をかいて尾根に出るとバウンダラの村。村人が水場で洗濯中。

再び歩き出すと右手の山腹に半端な数ではない美しい棚田が広がる。朝の内は日陰だった左岸にも日が当たり始めると大変な暑さ。対岸に三段の滝が水量も豊かに落ちているのを眺め、大きな吊橋で右岸に渡ってシャンゲのロッジ着。12時半。このロッジにも川に面するベランダがあった。ここはガラス張りで机にはテーブルクロス、造花も飾ってあった。

村の水場の水が勢いよく出たのでシャンプーをする。とても気持ち良かった。

午後は谷が陰しくなった山腹を1時間程歩くと空がみるみる暗くなり、雨が降り出す直前にジャガットの宿に着いた。

宿には温水シャワーがあるとの事だったのでお願いすると、カトマンズのホテルでは得られなかった、嬉しくて叫び出した程の温水が浴びられた。極楽極楽。

夕食には野菜も豊富に手に入るのか、おいしいタルカリが出た。チャンも美味しかったようだ。夕方から雨の降りがひどくなった。

#### 9月12日〈ジャガットーチャムチェ〉

7時過ぎ出発。雨は上っていたが、少し歩くと左手からマンシャンディに流れ込む急な沢が大きく崩れていて、倒木を利用して這うように渡る。

尚も進むと少し広げた所にチャムチェという村があり、今度はその先の大きな吊り橋が崩壊していた。前夜、対岸の岸壁上部から落石があり、橋のたもとのワイヤーが数本切断されたらしい。迂回路もないので取りあえずチャムチェへ戻り、2～3日様子を見ることになった。

私達の他にも停滞を余儀なくされたトレッカーが数人。それでも橋の残った部分を利用して渡ってくる人もいるようだった。

午後は洗濯したり宿の猫と遊んだりして過ごす。ヒルに吸われた跡の血が止まらず、気持ちが悪い。雨は日中に少しパラつくが夜には降らず。

#### 9月13日〈チャムチェ〉

停滞2日目。朝の内、再度壊れた橋を見に行く。残った片側はダメージを受けていないのか時々人が渡っている。身軽なら渡れそうだが私達の隊荷は大変だろう。近隣の村人が仮設の橋を作る相談をしているらしいが、この川幅と激しい流れを見ているとそれも恐ろしそうに思えた。手前の村では噂を聞いたトレッカーが何組も引き返したらしい。

昼ころには天気が崩れ、ヒルも出るので出歩けず、UNOをしたり様子を見に来た村の子と遊んだりした。子どもは涎も垂らさらんばかりに夢中で絵を描いて、終いにはこのペンちょうだいと言いだした。まだ山で使うからと断った。帰りのキャラバンの時に、大きくなったらこれで手紙をちょうだいと渡したかったが、叶わなかった。

夕方、ディビさんが仮設の橋は無理との情報を持って戻ってきた。そこで結局壊れた橋を使い地元のポーターを雇って隊荷を対岸に運んでもらう事にした。

夜、雨は激しさを増し、また岩が落ちるのではと心配になった。

#### 9月14日〈チャムチェーカルテ〉

幸い出発する時には曇り空ながら雨は上がり、7時頃から作業を始めた。地元のポーターは9人、賃金は1人千ルピー。

まず対岸の河原のある辺りまで6、70m背負って運び、そこからはロープを使って10m程下の河原に降ろすことになった。始めの内は荷物を運びやすい様バラしたが、だんだん要領がつかめてくるとそのままでも運べるようになっていった。

間に子供連れの村人やトレッカーもやって来た。大荷物の行商人もちゃっかり自分の荷物を一緒に河原に降ろしてもらっていた。

通行人は残ったワイヤーを伝って対岸の橋の袂まで行くわけだが、ザックを背負って運ぶアルバイトを始めた村人が、高い賃金をふっかけたので、西洋人トレッカーの中の1人が、私たちが価格をつり上げたとぶいぶい言い始めた。彼等のザックと我々の隊荷とでは、質量形状共に違うし支払い方法も違うと説明するが、彼女にはどこまで通じただろうか。

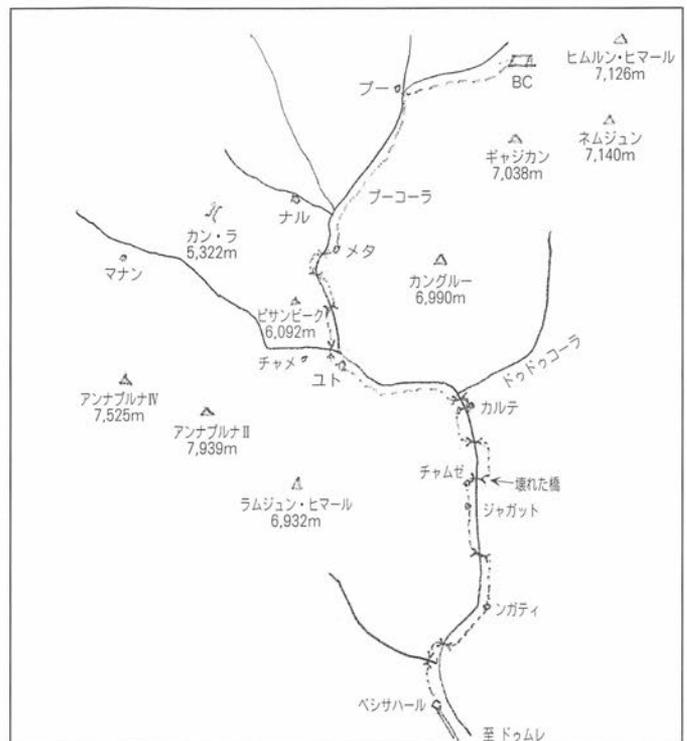
1日掛かりの仕事になったら心配したが、ヒルの攻撃を受けながらも、人も荷物も無事4時間足らずで対岸に渡り切ることができた。

11時半、サツレで昼食。午後、川幅が狭まり流れが大岩の下に隠れ道は登りになる。登りが終わると急に谷がひらけて流れも穏やかな広い河原に出る。その先のタルのチェックポストを過ぎると宿泊地カルテには4時前に到着。一日雲が晴れず、ぐずぐずしていたが夜にはしっかり降る。

#### 9月15日〈カルテコト〉

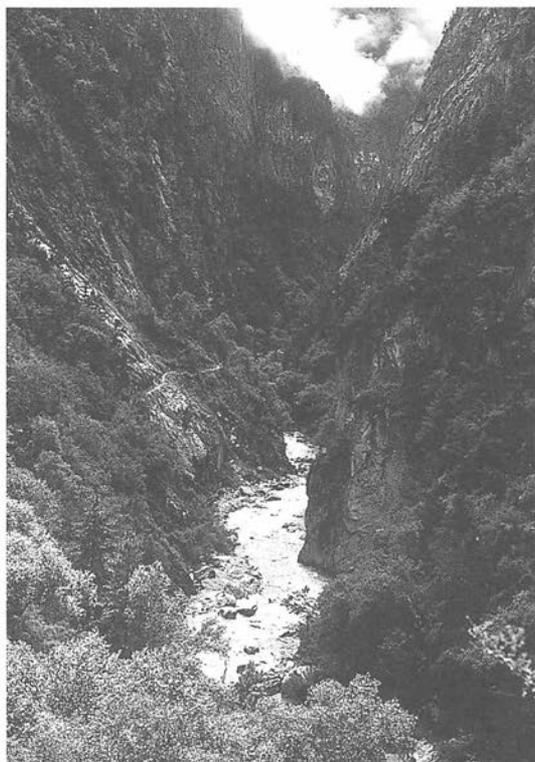
朝食はなんとお好み焼。今回は本当にメニューが多彩。

前夜からの雨が上がり切らず、どんよりとした空の下を歩き出す。林檎の収穫期だったらしく民



▲キャラバン・マーチ概念図

### ▼コトからメタ、プーコーラの峡谷



### ▲メタからプー



### ▲チャコのカルカ付近に行く

家の庭先にスライスしたものが干してあった。私達も採れたての林檎をごちそうになる。小さくてすっぱいけど歯ごたえがあっておいしい。

右手の対岸にドゥドゥコーラの流れる谷が見えてくる。冬のローツェ隊の田辺さんから聞いていた美人郷がその少し先にあるという事だった。

95年の冬に雪崩で多くの村人が亡くなったというチベット系の村、バガルキャップを過ぎ、ダナギュのアントレさんの同郷の人の家でお茶と林檎をよばれ、11時半ころラトマナンで昼食。対岸の斜面には白っぽい毛の猿の群れが見られた。

テラスで食事中、また雨が降り出す。この日は一日降ったり止んだりのお天気。道は所々荒れていたが途中の一軒家から道連れになった、まっ黒いボテ犬が道案内してくれた。薄桃色の花を満開に咲かせている蕎麦畑や製材している松林をぬけ3時頃コト着。午後からはお屋のトウモロコシのチャンが利いて皆のんびり。お陰で私は楽でした。

チャムチェでの停滞があったので、カン・ラ越えを断念し、コトからプーコーラ沿いの道に行くことになった。ビールのあるパッティもここまで。

### 9月16日〈コトーメタ〉

7時過ぎ、宿を出てすぐ、チェックポストで足止めされる。マオイストが停戦協定を破棄し、圧力鍋さえ爆弾になると言われる程警戒が強まって、ディビさんが何かと説明の為にあちこちに足を運ばなければならぬようだった。

幸い30分程で出発を許可されてマルシャンディ川を渡ってプーコーラの谷に入る。谷は深く、河原や山腹を削った山奥らしい道に行く。大きな街道ではなく、トレッカーもいないが、英文字による表記や、標高の表示もあるしっかりした道標が立てられていた。

天気は回復。何度かしっかりした吊橋を渡った後、大きな滝の裏側をくぐり抜けダルマサラに着く。小屋が見えたので本日はここまでと喜んだが無。行動食を食べて先に進む。道端の可憐な花が疲れを和らげてくれる。が、その内それも限界と思える急な登りが始まる。切り切ると谷の上の台地に出る。風景は一変し所々に白い布を風に翻すチベット風の仏塔やカルカが点在する草原が広がる。冷たい風が強く、カッパを着て歩いた。標

高が一気に上ったのと体調を崩したのとで遅れること3時間弱、メタに4時前到着。

石造りの無人の小屋の、平らな屋根の上に幕営。

9月17日〈メタープーガウン〉

7時出発。白い雲の峰も見え、野の花が咲き乱れる絶好のキャラバン道なのに完全に体調を崩しのろのろと進む。でも考えてみれば、もう富士山頂なみの標高だ。幸い道は平坦で天気も良好。

道沿いに上の村の人が冬を過ごす無人の集落が点在する。谷を挟んだ対岸の台地にも所々に民家や寺院らしいものが見える。

標高3,840mのキャンを過ぎると道はプーコーラの壮大なゴルジュ帯の切り立った岩壁の中を辿る。まさに大きな山の懐に入って行くという感じだ。

右手奥の小高くなった所に門が見え始める。プーガウンへの入口だ。喘ぎながら九十九折の道を登る。その石を積み、木の扉を付けた門をくぐると道の脇には文字の刻まれたマニ石が並びストゥーパが点在する白く乾いた別世界が広がっている。物語の中にいるようだ。

時々休みながらも進んで行くとプーコーラの広い河原の先に、マッチ箱の様な四角い家が斜面にへばり付くように並んだプーの村が見え始める。

早く着いたスタッフがへばっている私の荷物を取りに来てくれた。テントを持ったポーターの到着も遅れていたのだから先に着いた強いポーターが、迎えに戻って荷物を持って走るように追い越していった。ほんとうに彼等はすごい。

4時前にプーガウンに到着。

9月18日〈プーガウン〉

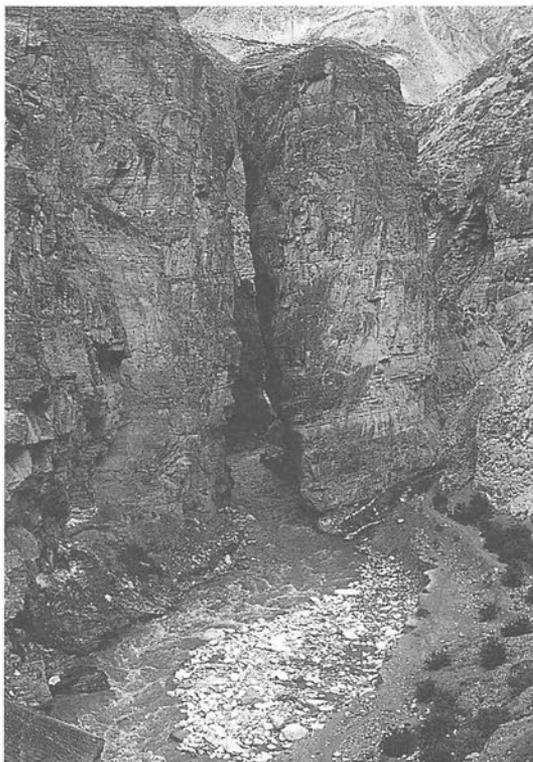
ついに熱でダウン。終日横になる。隊はBC入り。

9月19日〈プーガウン〉

熱が下がらず、もう一日停滞。

それでも少し楽になったので、プーの村を歩いてみることにした。白い石を積んだ壁の間を狭い坂道がくねくね通っている。水場では女の人達が洗濯。近くで鼻をたらした小さな子供達が連れだって走りまわっている。どこからか時々もう少し大きな子供達の呼び合うような声が響く。町の中のように車の音にかき消されることもない。収穫前の

## ▼プー入口の大ゴルジュ



麦畑の縁では青い草が刈られている。冬の間のヤクの餌だろうか。麦刈りが始まった村はいったいどんなだろう。

午後、今度は今村、ディビさんと一緒にもう少し上まで行ってみる。衛星電話のパラボラアンテナのある建物や小学校、少し離れた小高い斜面には立派な僧院があった。

9月20日〈プーガウン-BC〉

熱はあい変わらずだが頭痛や吐き気はないので、BCへ向かう。後で知ったのだが、万一に備えポーターを一人、BCに待機させていたようだ。

河原から一がんばりでモレーンの上に出るとBCが見えた。それは遥かかなた、絶望的に遠くに見えたが、ほんとうは3時間あまりの道のり。かぜ葉のせいもあってか、喉が乾いてしかたがない。果物の缶詰が本当に美味かった。途中のカルカまでジュースを持った迎えも来てくれ、どんどん水分補給しながらなんとか進む。黄色い甘酸っぱい実をつけた低木の生える斜面をぬけ、細々と水の流れる河原を渡り、皆に出迎えられてついにBC入り。7時間もかけてしまった。

## ▼プーコーラ最奥の村



標高約4,800m。でも陽が射していたので風が吹いていても寒くはなかった。

BCサイトはプーコーラの支流が始まる河原の横に広がる緩い斜面。牧草地になっていて、馬やヤクがやって来た。着いた頃はまだ青や黄色の花がちらほら咲いていた。所々に大小の岩がころがり、その1つに何時のものか古いタルチョが残っていた。

(記：今村文子)

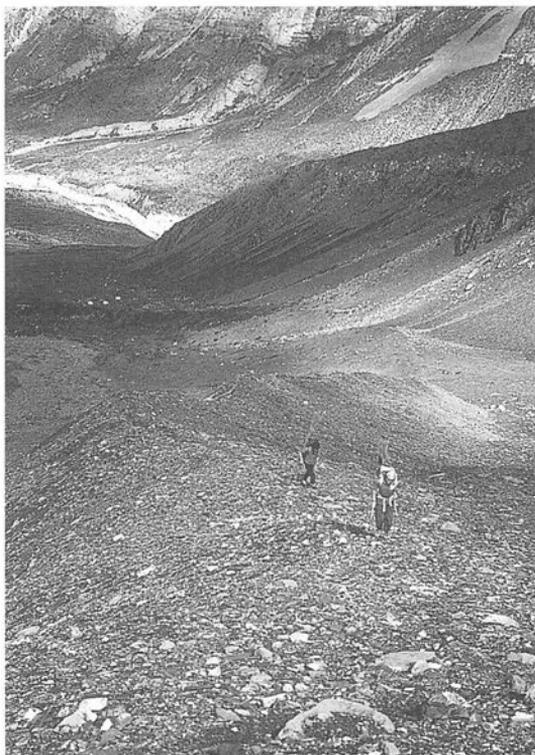
# 北西稜上で雪崩が発生した

## 登山の概要

9月21日 曇り後雨

BC開き

今村（文）はプーで熱を出し下がらないまま昨日、BC入りした。一晚BCで泊り熱は下がらないが動けるので大丈夫そうだ。



▲BCからC1のモレーン稜を登る

11時からBC開きのプジャをする。昼過ぎには飲み過ぎで皆ダウンしてしまう。

9月22日 曇り後雨

BC、4,800m～氷河舌端、5,250m往復

午前中、氷河舌端まで体慣らしに野沢井隊長、今村、川原の3名で荷上げに行く。

BCからモレーン稜を登り一度河原に少し下り砂利が積ったスラブを登ると小さな池がある氷河舌端に着く。所々ケルンを積みながら下る。以前のケルンも残っていた。

BC 8:10～氷河舌端 9:35 / 7:50～BC 10:40

9月23日 雪後曇り

BC停滞

昨夜からの雨が朝方から雪に変わりBCで1cm程の積雪。バンガリカルカ付近まで白くなった。今日の行動は中止。

昼前、プーの娘さん2人がBCにチャンなどを持ってきた。昨日から放牧の馬がBCに上がっている。

9月24日 雨

BC停滞

悪天の為、行動中止。放牧のヤクもBCに上がってきた。

9月25日 雪後曇り

BC停滞

明け方、一時雪が降る。今日も行動中止。

9月26日 晴れ

C1、5,450m往復

氷河舌端からは、階段状になった氷河をジグザグにつないで登る。クレパスは無かったが、念の為、アンザイレンして登る。雪が腐り歩きづらかった。

BC 8:15～氷河舌端 9:20 / 9:55～C1 / 12:15 / 12:35～BC 13:50

9月27日 晴れ時々曇り

C1往復

昨夜は少し雪が降るが、朝には天気は回復したので予定通りC1まで荷上げに行く。氷河上のトレースは残っており、今日は歩きやすい。

今村(文)はスタッフやバハドゥルと氷河舌端まで往復し1995年ティリッチミールで記録した最高到達点を4,800mから5,250mに更新した。

BC 8:10～氷河舌端 9:10 / 9:40～C1 10:30 / 11:40～BC 12:40

9月28日 晴れ

BC休養

モンスーンが明けたのか？

BCからチュルー方面がよく望めた。

9月29日 曇り後雪

BC休養

モンスーンはまだ明けていなかった。一日中曇り空。

9月30日 曇り

BC停滞

C1へ移動予定だったが、昨夜の雪で真白。昼になっても天候が回復しないので、今日の出発は中止になる。

10月1日 晴れ

C1移動、稜線、5,800mまで偵察

BCからC1に移動し、稜線までルートを延ばす。92年北海道大学隊が飛行場と呼んでいた盆地の手前は大きなクレパスがあり、大きく迂回するルートとなる。稜線までは雪の斜面の下をトラバース気味に登る。ひざ位までのラッセル。

10年の間に、氷河の状態はかなり変っているようだ。

BC 8:05～C1 10:45 / 11:30～稜線 14:30～C1 15:35

▼C1から北西稜に向ってプラトールに行く



## 事故と収容

10月2日 晴れ

C1～6,000m付近で雪崩事故～BC

まだ日が当たらないC1を出発。寒くすぐ手の指先の感覚が無くなる。昨日到達した稜線に9時30分に到着。北にはラトナチュリ、南にはギャジカン、南東にはアンナプルナ I からⅢまで望むことができる。

稜線から正面のピークまで今村が先頭でラッセル、膝位までのラッセルとなる。ピーク基部にはクレパスがあり、ここから野沢井隊長とトップを交替。ピーク直登は傾斜が強く、北海道大学隊は右から巻いていたので、我々も右から巻くように行く。ピーク基部を回り込み、近くに台地が見え、C2間近と思われた時、足元からすくわれるように雪崩が発生。

野沢井隊長と今村は雪崩に埋まり、最後尾を歩いていた川原は、少し流されクレパスに落ち運良く雪崩に埋らず、クレパスから自力で脱出し今村を掘り出す。二人で野沢井隊長を掘り出すが、すでに息はなく死亡していた。今村が掘り出された時刻は12時30～40分頃、雪崩発生時刻は12時頃と思われる。

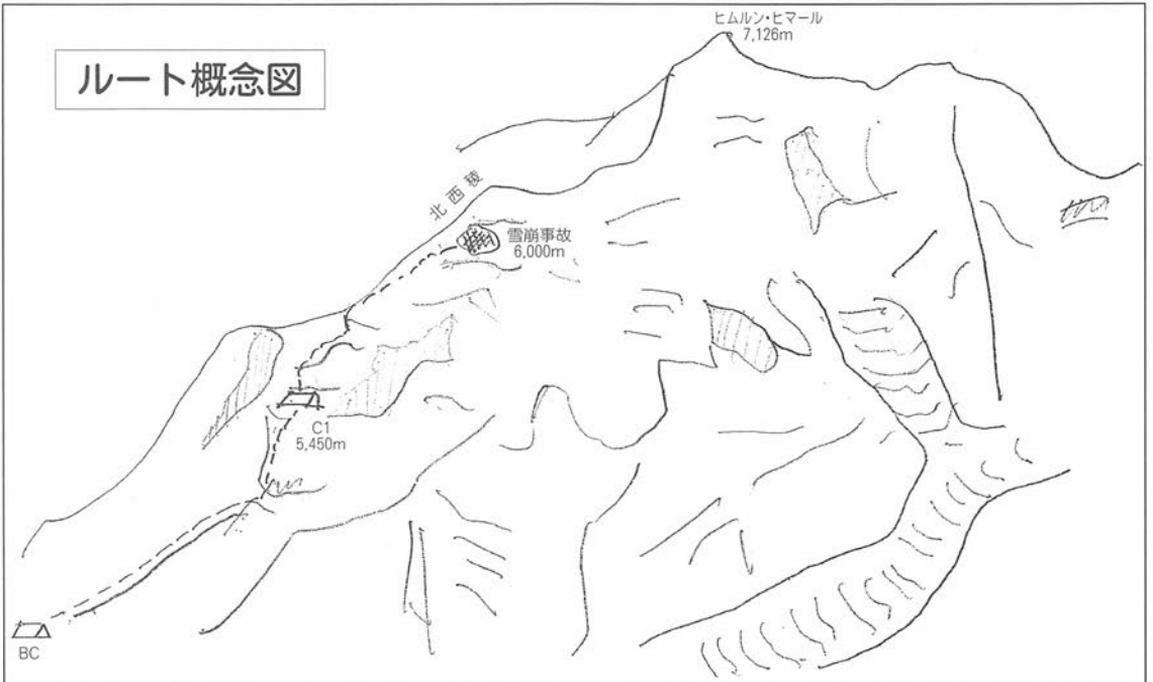
隊長のザックからトランシーバーを取り出し、BCに事故を連絡。C1までの救援とプーの村からカトマンズへ電話で事故連絡を頼む。今村と川原は一旦BCへ下ることにする。C1直下でサポートのディビ、アントレと会う。遺体収容の為、ガイドの応援をカトマンズに要請するため、ディビに



ヒムルン・ヒマルル(右)と  
事故のあったスノードーム(左)



B C 対岸から見た事故のあったスノードームを望む



プーに下ってもらう。

C1 7:45～稜線 9:30 / 9:45～雪崩発生12:00頃  
～BC15:40

10月3日 曇り時々晴れ

C1移動

救援のガイド4名が昼過ぎにBCに到着する。小型のヘリだったのでプーまでしか来られなかったようだ。ガイド達がBCで昼食後、今村、川原計6名でC1に移動する。ガイドと一緒にBCに戻ってきたディビには、詳しい事故状況を報告してもらう為、もう一度プーに下ってもらう。

ヒムルン・ヒマールを目指すフランスパーティがBCに入って来た。

BC14:15～C1 17:05

10月4日 晴れ

C1～遺体収容～BC

夜中、一時雪が降っていたが快晴の朝、予定通り収容に向う。雪崩による二次遭難が、ちょっと心配だ。

稜線からプーに下ったディビとトランシーバーで連絡が取れる。検死が必要な為、これからチャーメまで下り、警察官と共に撤収用のヘリコプターで2～3日後BCに戻って来ると聞く。

8時頃事故現場に到着、遺体を収容しシュラフカバーに入れ、ブルーシートで巻き降ろす。氷河上は滑らして降ろすことができたが、ガラ場を降ろす時はBCスタッフの応援も求め1日でBCに収容することができた。

C1 5:40～事故現場 8:00～C1 10:40 / 11:05～氷河舌端11:40～BC14:30

10月5日 晴れ

プー往復

遺体をBCに収容した事を連絡する為、今村がスタッフ1名と共にプーに下る。

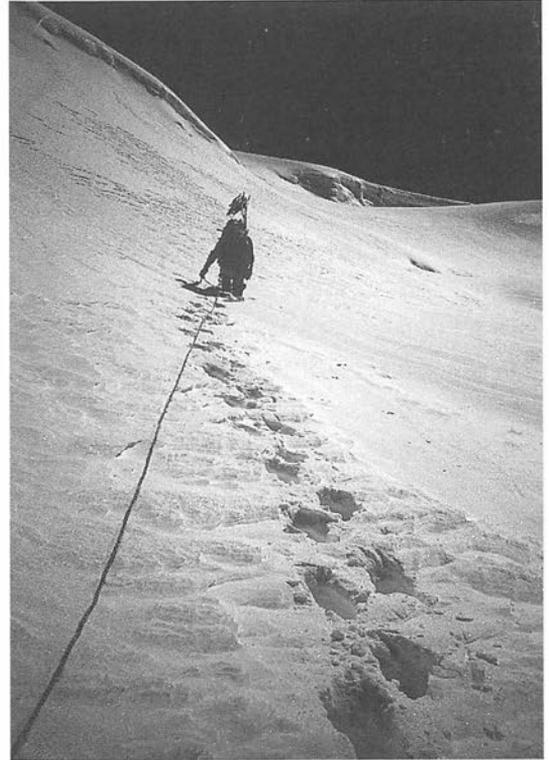
14時前カトマンズと電話がようやくつながり明朝、大型ヘリを飛ばし全て撤収。ディビとも連絡が取れ、明朝8時までにBCの撤収準備を終えることになった。昨日C1に残置された隊荷はガイド達によってBCに降ろされた。

BC 8:00～プー10:40 / 14:00～BC17:25

10月6日 晴れ

BC～チャーメ～カトマンズ

▼事故直前、現場付近を登る野沢井歩隊長



▼雪崩現場、ザイルの先に川原が落ちたクレバス



▲カトマンズのガイドらによって遺体を収容

早く起きBC撤収の準備をすませる。8時過ぎBCにヘリが到着。ディビと警察官も乗って来る。BCで簡単な説明後、チャーメまで戻る。ここで遺体の検死。ヘリはもう一度BCまで戻り、残りのスタッフ、隊荷を積んで来る。ヘリだとカトマンズまであつと言う間だ。空港からは、コスモトレックのスタッフによって隊荷が事務所に運ばれた。遺体はドリブバン大学の教育病院に運ばれ、夕方、医師による検死が行われた。

コスモトレックの事務所には、雪男捜索隊から戻って来られた飛田氏が心配されて来られ、強い励みとなった。

事故からカトマンズに戻るまでの時の流れは早かった。

BC 8:10～チャーメ 8:30 / 9:10～カトマンズ 10:00

### カトマンズにて

10月7日

バーバリアンクラブ岩崎さん、関係者2名カトマンズ着。

10月10日

フライトが遅れ夜中1時頃、バーバリアンクラブ金子さんと野沢井隊長の弟さんと妹さんカトマンズ着。

10月12日

親族、関係者でマウンテンフライト。ヒムルン・ヒマール上空は風が強く近づけず、チャーメ上空を旋回しヒムルン・ヒマール方向を遠望する。

夜、野沢井隊長のお父さんがカトマンズ着。

10月13日

スワヤンプナートで親族および多くの関係者、友人が参列し、葬儀がおこなわれ茶毘される。

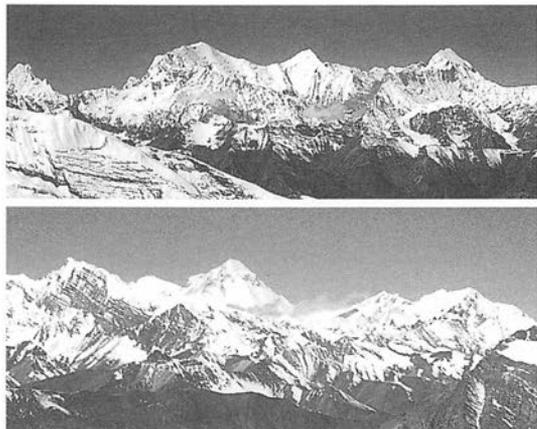
10月14日

親族、関係者、隊員（今村）カトマンズを出発し、翌15日帰国。水戸の実家にご報告に行く。

### 終わりに

この度の事故に際しましては、多くの方々のご協力によって敏速な遺体収容ができ、カトマンズでご親族、関係者が見守る中、葬儀、茶毘が滞りなく行なわれました。

▼左からマチャプチャレ、AⅢ、ガンガプルナ、AⅠ



▲ダウラギリⅠ

ラトナ・チュリ▼



▲BC（左下）とチュルー、ポカルカン

この場をお借りしてご支援を賜った方々に厚くお礼を申し上げます。

野沢井隊長は、これからヒマラヤ協会の核として活動する予定であり、ヒマラヤ登山や人生半ばでこの様なことになり未練が残ることだったでしょう。個人的にも貴重な長年の友人を失い残念でしたかありません。

（記：今村裕隆）

（上の三枚はいづれも北西稜上から）

## Nuptse East Summit Tower – Route and Camps (Yuri Koshelenko)



### ネパール・ヒマラヤ ヌプツェ東峰(7,804m)初登頂

ロシアのヴァレリー・ババノフ(38)とユーリ・コシュレンコ(40)が東峰の初登頂に標高差2,300mに及ぶサウスピラーから成功した。

このルートは1986年J・ロウとM・トゥワイト等の挑戦以来多くのクライマー達の挑戦を退けてきた。ロウ、トゥワイトはアルパインスタイルで6,700mまで。89年にはカナダ隊が7,300m。95年にはフランスENSA隊が1,000m以上の固定ロープを用いて7,500mまで到達、2002年にアメリカのスティーブ・ハウスとスロベニアのマルコ・プレゼリ等も挑戦している。ババノフも今回が3度目の挑戦となる。昨年は単独だった。

今回はバギラティⅢ峰西壁、グレート・トランゴ北西壁に新ルートを拓き、2001年にはローツェ中央峰の初登頂にも成功した実力者コシュレンコをパートナーにして挑んだ。9月21日BCについてみると、

そこにはアメリカペアの先客があったが、ババノフのこれまでの実績を知っている二人はルートを変更し、ロシアパーティは予定通りのラインに取り付いた。二人は要所に固定ロープを用い、前進キャンプも設置した。

1度目の頂上アタックは7,000m付近で悪天の為に断念。一旦ディンボチェまで下り、10月29日最後のアタックを開始し、6,200m、6,900m、7,450mとビバークして11月2日午後7時30分東峰の初登頂に成功、4日に無事BCに下山した。

この登攀は2003年の傑出した登攀としてフランス、モンターニュ誌の主催する“ピオレ・ドール(黄金のアクセス)”の候補となっている。ババノフは2001年のインド・ガンゴトリ山群メル中央峰(シャークスフィン)を単独初登頂で受賞している。

(協力：中村保、中川裕、ユーリ・コシュレンコ)

## 地域ニュース

### 《ネパール》

#### ローツェ南壁登頂断念

JAC東海がローツェ(8,516m)南壁から冬期登頂を目指して派遣した登山隊(田辺治隊長(41)ら4名)は、8,300m地点まで到達し、12月18日、アタックのため田辺隊長とシェルパ3名がBCを出発しC1(5,900m)に入ったが、登頂予定日まで天候が悪化するとの予報で、これ以上登高を続けると雪崩に巻き込まれる可能性が高いと判断し、以後の登山を断念した。

### 《中国》

#### チャー・オユー (8,201m) に登頂

アドベンチャーガイズ(AG)の2班がチャー・オユーの登頂に成功した。登山隊は大蔵喜福(52)隊長のA班(8名)と佐々木慶正(48)隊長のB班(6名)。9月27日、B班の佐々木隊長、日野美紀江(53)、谷口由利子(53)、茂木康枝(53)、鈴木克茂(63)が先ず登頂、翌28日、A班の大蔵隊長、小川武(60)、石井伸一(58)、高田邦秀(46)、鈴木昭(66)、折原幸子(67)、坪山淑子(60)も登頂した。大蔵隊長は「平均年齢60歳なので高度順応に下部4,000m～6,000m間で無理のない範囲で8回行動、C1へ一度往復、酸素は睡眠用・行動用共にC2から頂上まで使用した」と報告している。

この他、秋のシーズンに9月16日、河野千鶴子(56)、9月21日、林孝治(51)、山下きよし(53)、国枝宏子(63)、佐藤千恵子(57)、9月27日、倉岡裕之(42)、白井和美(59)、斎藤鐘吉(48)、田村俊彦(45)、芳田猛則(54)、田村真司(37)が登頂した。

#### フンチ (7,039m) 登頂断念

春にネパール側から大阪鋭峰会によって初登頂されたフンチに、秋のシーズン中国側から中村正勝隊長(59)、百瀬尚幸(56)、中島俊弥(38)、西之園徹(35)の長野県紅旗峰登山隊が北面から挑戦したが、頂上頂下100mで登頂を断念した。尚、中

村隊長は高山病のためABCから下山した。

#### ルオニー (6,610m) 登頂断念

秋に神戸大学隊(北口博教隊長(59)ら9名)が東面から挑戦したが、10月23日、5,800m地点に到達したものの雪が降り続き天候が回復しないため雪崩の危険があり登頂を断念した。

#### 無名峰 (6,536m) 登頂断念

ニンチン・カンサの西側にあるジャンスラモ(6,325m)を目指した林孝治ら7名は同峰の北西にある無名峰の6,100mに到達したが登頂を断念した。

## トピックス

### 都岳連 第25回高所順応研究会の開催

高所順応のやり方、高所障害への対処など、高所順応をテーマにした国内唯一の研究会です。

海外の高峰登山やトレッキング等を計画されている方の参加をお待ちしております。

記

日時：2月28日(土) 9:15～17:00

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

講師：塩田純一医師、山下順子氏、平岡竜石氏、

中村圭司氏

参加費：3,000円

申し込み・問い合わせ：東京都山岳連盟

TEL：03-5524-5231 FAX：03-5524-5232

(月～金 13:00～17:00)

■財政支援〔5万円〕中川裕〔3万円〕中岡久、天城敏彦、松元邦夫〔1万円〕出口當、野口道雄

### 東京集会のお知らせ

日時 2月23日(月) 午後7時～

内容 イエティ・ビデオ鑑賞

場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)  
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

# 日本人八千メートル峰登頂者 生年月日別リスト

(2003年12月31日現在)

[2004. 1. 17 山森欣一作成]

(氏名の前の×印は死亡者／fは女性／年齢は登頂時／備考のⅡは八千m峰登頂回数)

生 年 月 日	氏 名	最初に登頂した山	年齢	備 考
1914 9	×今 西 壽 雄	マナスル (1956)	41	1956.5.9 初登頂・1995.11.15 病死
1910年代= 1人 [内女性0人] 山岳での死亡=0人 [内女性0人]				
1920 11	×加 藤 喜一郎	マナスル (1956)	35	1987.12.10 病死
1929 9	齋 藤 惇 生	シシャパンマC (1990)	60	
1920年代= 2人 [内女性0人] 山岳での死亡=0人 [内女性0人]				
1930 6	日下田 実	マナスル (1956)	25	
9	中 島 道 郎	シシャパンマC (1990)	59	
1931 4	f内 田 敏 子	チョー・オユー (2002)	71	八千m峰世界最高年齢登頂記録保持
1932 10	三 浦 雄一郎	チョー・オユー (2002)	69	Ⅱ 2003.5.22 エヴェレスト最高齢登頂
1933 1	加 藤 幸 彦	チョー・オユー (2002)	69	1964.4.10 ギャチュン・カン初登頂
1934 2	松 浦 輝 夫	サガルマータ (1970)	36	1970.5.11 日本人初登頂
12	平 林 克 敏	サガルマータ (1970)	35	
1935 2	平 田 恒 雄	チョー・オユー (2000)	65	
4	×原 田 達 也	シシャパンマC (1995)	60	1997.8.20 スキルブルム雪崩死亡
10	荒 山 孝 郎	チョー・オユー (1999)	63	
11	桑 原 巖	シシャパンマC (1994)	58	
1936 5	青 木 正 次	チョー・オユー (2000)	63	
7	山 本 俊 雄	チョー・オユー (1995)	59	Ⅱ
8	f折 原 幸 子	チョー・オユー (2003)	67	
8	原 真	シシャパンマC (1982)	46	A P
11	石 川 富 康	チョー・オユー (1992)	54	Ⅵ
1937 1	田 中 元	マカルー (1970)	33	1970.5.23 南東稜初登攀、日本人初登頂
1	奥 克 彦	シシャパンマC (1999)	62	
12	鈴 木 昭	チョー・オユー (2003)	66	
12	f中世古直子	マナスル (1974)	36	1974.5.4 世界女性初の八千m峰登頂
1938 5	鈴 木 孝 雄	チョー・オユー (1992)	52	Ⅱ
6	f白 岩 靖 子	チョー・オユー (2002)	64	
8	阿久津悦夫	サガルマータ (1985)	47	
11	×小 西 政 継	ダウラギリⅠ (1994)	55	Ⅲ 1996.10.1 マナスル登頂後行方不明
11	f渡 邊 玉 枝	チョー・オユー (1992)	52	Ⅲ 2002.5.16 エヴェレスト女性最高齢登頂
11	池 田 錦 重	チョー・オユー (1992)	52	Ⅱ
1939 1	尾 崎 祐 一	マカルー (1970)	31	1970.5.23 南東稜初登攀、日本人初登頂
1	谷 口 正 彦	チョー・オユー (1998)	59	
4	今 野 一 也	チョモランマ (2000)	61	
4	酒 井 國 光	ブロード・ピークM	49	(1988)

生 年	月	日	氏 名	最初に登頂した山	年齢	備 考
1939	8		三 渡 忠 臣	チョー・オユー (2000)	60	Ⅲ 1975.5.16 世界女性初登頂 (1998) 1970.10.20 日本人初登頂、秋期初登頂 Ⅲ 1998.11.15 巻機山で滑落死亡
	9		f 田部井 淳 子	サガルマータ (1975)	35	
	10		森 山 勇	ガッシャーブルムⅡ	58	
	11		川 田 哲 二	ダウラギリⅠ (1970)	30	
	12		×根 津 皖 一	チョー・オユー (1992)	51	
1930年代=35人 [内女性6人]				山岳での死亡=3人 [内女性0人]		
1940	3		鈴 木 克 茂	チョー・オユー (2003)	63	1971.5.17 西稜初登攀 Ⅱ 1994.2.3 病死 Ⅱ
	4		小 原 和 晴	マナスル (1971)	31	
	5		×日 野 悦 郎	チョー・オユー (1986)	46	
	11		川 原 慶 紀	シシヤパンマC (1994)	53	
	?		f 国 枝 宏 子	チョー・オユー (2003)	63	
1941	1		村 田 博	チョー・オユー (2002)	60	1974.5.4 世界女性初の八千m峰登頂 1970.5.11 日本人初登頂 1984.2.13 1974.5.4 世界女性初の八千m峰登頂 (2001) Ⅶ
	1		f 内 田 昌 子	マナスル (1974)	33	
	2		×植 村 直 己	サガルマータ (1970)	29	
	3		太 田 祥 子	チョー・オユー (2002)	61	
	5		f 森 美 枝 子	マナスル (1974)	32	
	8		大 内 一 成	ガッシャーブルムⅡ	59	
11		近 藤 和 美	チョー・オユー (1992)	50		
1942	2		f 高 橋 通 子	チョー・オユー (1987)	45	(1993) Ⅱ 1977.8.8 日本人初登頂 1977.8.8 日本人初登頂 1980.5.14 日本人初登頂無酸素
	4		田 村 正 勝	ブロード・ピークM	51	
	5		中 村 省 爾	K2 (1977)	35	
	6		f 日 比 栄 子	チョー・オユー (2001)	59	
	7		小 川 武	チョー・オユー (2003)	60	
	8		高 塚 武 由	K2 (1977)	34	
	12		f 坪 山 淑 子	チョー・オユー (2003)	60	
	11		深 田 良 一	カンチェンジュンガM	37	
1943	1		高 橋 和 之	ローツェ (1983)	40	Ⅱ (2001) 1997.8.20 スキルブルムで雪崩死亡 Ⅱ 1978.5.10 南稜初登攀
	2		青 木 丈 夫	ガッシャーブルムⅡ	58	
	2		畠 山 正 昭	チョー・オユー (1995)	52	
	3		×廣 島 三 朗	K2 (1977)	34	
	4		佐 藤 邦 彦	チョー・オユー (2002)	59	
	4		重 野 太 肚 二	ダウラギリⅠ (1978)	35	
	10		小野寺 正 英	K2 (1977)	33	
	10		花 崎 洋	チョー・オユー (2002)	58	
1944	3		石 井 伸 一	チョー・オユー (2003)	58	無酸素 (1980) 1982.8.31 Qogir死亡
	5		f 大神田 伊曾美	チョー・オユー (1999)	55	
	7		×坂 野 俊 孝	カンチェンジュンガM	35	
	8		f 倉 井 登 代	チョー・オユー (1996)	52	
	?		白 井 和 美	チョー・オユー (2003)	59	
1945	5		×高 見 和 成	チョゴリ (1982)	37	北稜無酸素 1998.2.22 大山滑落死亡
1940年代前半=34人 [8]				死亡=4人 『戦前・戦中生れ合計72人 [14]』		

生 年	月	日	氏 名	最初に登頂した山	年齢	備 考	
1945	9		石 黒 久	サガルマータ (1973)	28	1973.10.26 秋期初登頂	
	9		千 葉 孝 義	シシヤパンマ C (1982)	37	A P	
	10		清 水 清 二	ダウラギリ I (1978)	32	南稜	
	10		金 沢 健	チャー・オユー (1992)	46		
1946	1		飛 田 和 夫	ヤルン・カン (1981)	35	1981.5.9 日本人初登頂	
	1		中 村 進	チョモランマ (1988)	42		
	8		安 村 淳	シシヤパンマ C (1999)	53	III	
	10	f	河 野 千鶴子	チャー・オユー (2003)	56		
	10		池 田 壮 彦	シシヤパンマ C (1994)	47	II	
	11		成 崎 公 生	ダウラギリ I (1995)	48		
	11		八木原 圀 明	ヤルン・カン	34	III 1981.5.9 日本人初登頂	
	?	f	佐 藤 千恵子	チャー・オユー (2003)	57		
1947	2		坂 下 直 枝	カンチェンジュンガM	33	II 1980.5.16 日本人初登頂 無酸素	
	4		大 谷 映 芳	K 2 (1981)	34	II 1981.8.7 西稜初登攀	
	4		影 山 淳	マナスル (1976)	29		
	6		辻 美 行	ブロード・ピークM	30	II 1977.8.8 日本人初登頂	
	6	×	早 坂 敬二郎	ブロード・ピークM (91)	44	1992.3.22 大天井岳で雪崩遭難死亡	
	10		重 廣 恒 夫	K 2 (1977)	29	V 1977.8.8 日本人初登頂	
	11		宮 崎 勉	ダウラギリ I (1978)	30	V 1978.10.19 南東稜初登攀	
	11		野 口 光 二	チョモランマ (2002)	54		
	12		島 方 健 次	ブロード・ピークM	40	(1988)	
	12		斉 藤 勤	ダウラギリ I (1998)	50		
	12		田 中 成 三	アンナプルナ I (1979)	31	1979.5.8 日本人初登頂	
	12		川 村 晴 一	カンチェンジュンガM	32	III 1980.5.16 日本人初登頂 無酸素	
	1948	2		保 坂 昭 憲	カンチェンジュンガM	33	II (1981)
3			泉 田 清 幸	チョモランマ (2003)	55		
5			馬 場 博 行	チャー・オユー (1992)	44		
7			尾 形 好 雄	ヤルン・カン (1981)	32	V 1981.5.9 日本人初登頂	
7		×	宇 部 明	ダウラギリ I (1978)	30	1978.10.19 南東稜初登攀 1980.5.2	
7			田 中 基 喜	マナスル (1971)	22	II 1971.5.17 西稜初登攀	
8			湯 田 一 男	マカルー (1982)	34	1982.9.30 無酸素登頂	
9			馬 場 保 男	ガッシャーブルム II	48	(1997)	
11			松 本 正 城	ガッシャーブルム II	36	(1985)	
12			谷 口 守	ナンガ・バルバット	34	IV 1983.7.31 日本人初登頂	
12		×	小 林 利 明	ダウラギリ I (1978)	29	1978.5.10 南稜初登攀 1982.12.27	
1949		1		山 下 健 夫	チョモランマ (2000)	51	
		1		賀 集 信	ブロード・ピークM	36	(1985)
	2	f	真 嶋 花 子	チャー・オユー (1996)	47		
	2		東 英 樹	ガッシャーブルム I)	32	1981.8.3 日本人初登頂	
	2	f ×	難 波 康 子	サガルマータ (1986)	47	1986.5.10 帰路サウスコルで死亡	
	3	×	加 藤 保 男	サガルマータ (1973)	23	IV 1973.10.26 秋期初登頂 1982.12.27	

生年	月	日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
1949	3		×加藤 康二	ダウラギリ I (1978)	29	1981.10.31 アンナブルナ I 行方不明
	4		大宮 求	カンチェンジュンガM	31	II 北壁 無酸素
	4	f	×北川 みはる	ガッシャーブルム II (88)	38	1995.1.1 穂高岳雪崩死亡
	9		荒木 富美雄	チョー・オユー (2000)	50	II
	10		和田 城志	カンチェンジュンガS	34	IV 1984.5.18 日本人初登頂
	10		×俵谷 久義	ダウラギリ I (1995)	45	1995.10.6 北東稜登頂後帰路行方不明
	11		下鳥 康三	ガッシャーブルム I	31	1981.8.3 日本人初登頂
	11		佐藤 英雄	ガッシャーブルム II	30	1980.8.2 日本人初登頂
	12	f	谷口 由利子	チョー・オユー (2003)	53	
	12		山本 秀夫	K2 (1977)	27	II
	?		芳田 猛則	チョー・オユー (2003)	54	
1940年代後半52人 [5] 死亡8人 [2] 1940年代合計86人 [14] 死亡12						
1950	1		宮崎 豊文	シジャパンマC (1992)	42	
	2		×吉野 寛	ダウラギリ I (1978)	28	III 1983.10.9 サガルマータで死亡
	2		×山田 昇	ダウラギリ I (1978)	28	12座 1989.2 マッキンリー死亡
	2	f	日野 美紀江	チョー・オユー (2003)	53	
	3		×藤倉 和美	カンチェンジュンガM	31	(1981) 1981.9 ナンダカート雪崩死亡
	3		八嶋 寛	ヤルン・カン (1981)	31	II 1981.5.9 日本人初登頂
	3		八幡 敏正	ブロード・ピークM	41	(1991)
	5		松林 公蔵	シジャパンマC (1990)	39	
	7		佐藤 信二	チョー・オユー (1996)	45	II
	8	f	茂木 康枝	チョー・オユー (2003)	53	
	9		松井 公治	ナンガ・バルバット	36	(1987)
	9		関谷 正一	ダウラギリ I (1993)	43	
	9		小野寺 斉	チョモランマ (1998)	47	
	10	f	柳沢 伸子	ガッシャーブルム II	37	(1988)
	10		松沢 哲郎	シジャパンマC (1990)	39	
	10		福島 正明	ガッシャーブルム II	29	II 1980.8.2 日本人初登頂
	12		瀬戸 嗣郎	シジャパンマC (1990)	39	
12		伊藤 清春	チョー・オユー (1995)	44		
?		山下 きよし	チョー・オユー (2003)	53		
1951	2		大蔵 喜福	チョー・オユー (1987)	36	III
	3		佐々木 正人	ブロード・ピークM	37	(1988)
	3		貫田 宗男	チョモランマ (1991)	40	III
	5		柳田 住吉	チョー・オユー (2002)	51	
	7		桑川 章	ガッシャーブルム II	49	(2001)
	8		野呂 和久	ブロード・ピークM	25	1977.8.8 日本人初登頂
	9		林 孝治	シジャパンマC (1994)	42	II
	10		×禿 博信	ダウラギリ I (1981)	29	III 1981.6.1 北東稜単独・AP 1983.10
	10		滝根 正幹	K2 (1997)	45	西壁
	11		岡林 良一	ナンガ・バルバット	35	(1987)

生 年	月	日	氏 名	最初に登頂した山	年齢	備 考	
1951	12		西 堤 理 一	ブロード・ピークM	33	(1985)	
			×二 上 純 一	チョモランマ (1991)	39	1991.5.27 北稜登頂後帰路転落行方不明	
1952	1		斎 藤 敏 明	チャー・オユー (1996)	44		
			谷 弘 行	ダウラギリ I (1978)	26	1978.10.19 南東稜初登攀	
			出 水 明	シシャパンマC (1990)	38		
			江 崎 幸 一	チョモランマ (2000)	48		
			田 中 淳 一	ダウラギリ I (1982)	30		
			×石 橋 真	マカルー (1982)	30	無酸素 1985.5.4 アマダブラムで死亡	
			尾 崎 隆	ブロード・ピークM	24	VII 1977.8.8 日本人初登頂	
			×角 田 不 二	ヤルン・カン	28	1981.5.9 日本人初登頂 1984ナンガ	
			f 橋 本 しをり	ガッシャーブルムII	35	(1988)	
			橋 本 久	チョモランマ (1998)	45	II	
			矢 野 利 明	チョモランマ (1998)	45	II	
			小笠原 岩 雄	ブロード・ピークM	38	II (1991)	
	11	八 橋 秀 樹	チャー・オユー (1992)	39			
1953	1		吉 田 憲 司	K 2 (1985)	32		
			×斎 藤 安 平	ダウラギリ I	29	III 1982.10.18 北西稜初登攀 1987.12.20	
			鈴 木 繁	ローツェ (1983)	30		
			平 田 和 男	シシャパンマC (1990)	37		
			鈴 木 昇 己	カンチェンジュンガM	27	II 1980.5.16 日本人初登頂 無酸素北壁	
			矢 崎 政 美	ダウラギリ I (2001)	48		
			吉 田 秀 樹	ブロード・ピークM	44	(1997)	
			佐久間 利 美	ガッシャーブルムII	27	(2001)	
			佐 藤 賢	チョモランマ (1998)	44		
			11	×榊 原 義 夫	ナンガ・バルバット	43	(1997) 2003.10.8 チョラツェ死亡
1954	1		上 野 幸 人	ダウラギリ I (1994)	40	III	
			磯 野 剛 太	カンチェンジュンガC	30	1984.5.17 日本人初登頂	
			榊 原 雅 晴	シシャパンマC (1990)	36		
			長 岡 健 一	ローツェ (1997)	43		
			片 岡 邦 夫	カンチェンジュンガM	27	(1981)	
			牧 野 総治郎	チャー・オユー (2000)	46		
			山 崎 幸 二	チョモランマ (1995)	41		
			駒 宮 博 男	シシャパンマC (1982)	28	A P	
			×小 松 幸 三	ダウラギリ I (1982)	28	1982.10.18 北西稜初登攀 1989.2	
			9	小 林 重 一	チョモランマ (2000)	45	
			10	阿 部 正 巳	ブロード・ピークM	36	(1991)
	11	名 塚 秀 二	サガルマータ (1985)	30	X		
1955	1		鈴 木 茂	ダウラギリ I (1978)	23	II 南東稜	
			×柳 沢 幸 弘	アンナプルナ I (1981)	26	II 1981.10.29 南壁初登攀 1982.8.15	
			佐々木 慶 正	チャー・オユー (2003)	48		
			3	村 上 和 也	ローツェ (1983)	28	III 1983.10.9 日本人初登頂

生 年	月	日	氏 名	最初に登頂した山	年齢	備 考
1955	5		菊 池 守	ナンガ・バルバット	30	II (1985)
	6		f 東 条 真百合	ガッシャーブルム II	33	II 旧姓・安原 (1988)
	6		×二 俣 勇 司	マカルー (1991)	36	1992.10.2 クラウンで雪崩行方不明
	8		田 中 敏 雄	チョー・オユー (1995)	40	II
	9		×杉 山 洋 隆	チョモランマ (1995)	40	1999.8.10 バトゥラ I で雪崩死亡
	10		f 吉 田 文 江	ガッシャーブルム II	32	IV 旧姓・木村 (1988)
	11		小 泉 章 夫	ダウラギリ I (1982)	26	1982.12.13 北東稜から冬期初登頂
	?	斎 藤 鐘 吉	チョー・オユー (2003)	48		
1956	2		木 本 哲	サガルマータ (1985)	25	II
	3		f 松 元 サ チ	ブロード・ピーク M	32	(1988)
	3		f 山野井 妙 子	ブロード・ピーク M	35	IV 旧姓・長尾
	3		藤 原 拓 夫	ガッシャーブルム II	41	(1997)
	5		村 口 徳 行	チョモランマ (1998)	41	III
	6		大 林 一 成	ガッシャーブルム II	37	II
	6		富 田 雅 昭	マナスル (1981)	25	II
	7		早 川 晃 生	チョー・オユー (1987)	31	
	8		児 玉 隆 司	チョモランマ (2000)	43	
	8		×香 川 毅	ローツェ (1983)	27	南米で行方不明
	10		高 橋 哲 也	シシャパンマ C (1991)	35	
10		小 林 新 二	チョー・オユー (1987)	30		
11		伊 藤 克 美	シシャパンマ C (1999)	42		
1957	1		児 玉 誠	シシャパンマ C (1991)	34	
	2		高 橋 和 夫	チョー・オユー (2002)	45	
	2		坂 井 広 志	ナンガ・バルバット	38	1995.7.23 北面初登攀
	2		鈴 木 清 彦	シシャパンマ C (1989)	32	II
	2		道 脇 幸 博	マカルー (1982)	25	無酸素
	2		遠 藤 晴 行	サガルマータ (1983)	26	IV 南東稜無酸素
	4		永 田 竜	シシャパンマ C (1990)	33	
	4		f 山 口 晶 代	チョー・オユー (1996)	39	
	5		高 田 邦 秀	チョー・オユー (2003)	46	
	6		梁 瀬 佐 一	ブロード・ピーク M	40	(1997)
	6		岡 田 勇 孝	マカルー (1991)	34	
	9		加 藤 洋	チョー・オユー (1990)	32	
10		山 本 正 嘉	チョー・オユー (1995)	37		
10		×三 枝 照 雄	サガルマータ (1985)	28	V 1989.2 マッキンリーで死亡	
12		永 田 幸 一	チョモランマ (1998)	40		
1958	1		青 田 浩	アンナプルナ I	23	II 1981.10.29 南壁初登攀
	1		塚 本 茂 登	チョー・オユー (1992)	34	
	2		外 山 哲 也	ブロード・ピーク M	27	(1985)
	3		中 西 紀 夫	ナンガ・バルバット	25	II 1983.7.31 日本人初登頂
	3		三 谷 統一郎	ダウラギリ I (1982)	24	VII チョー・オユー日本人初登頂

生 年	月	日	氏 名	最初に登頂した山	年齢	備 考
1958	4		清 水 修	ガッシャーブルム I	28	II 1986.8.2 北稜初登攀
	6		倉 嶋 博 之	ガッシャーブルム I	39	(1997)
	7		富 永 浩 三	シシャパンマ C (1990)	31	
	8		北 村 貢	チョー・オユー (1985)	27	1985.10.3 日本人初登頂
	8		佐 伯 成 司	ガッシャーブルム I	35	(1994)
	8		高 橋 堅	ガッシャーブルム II	26	(1985)
	12		和久津 清	ガッシャーブルム I	27	1986.8.2 北稜初登攀
	?		田 村 俊 彦	チョー・オユー (2003)	45	
1959	4		今 村 裕 隆	チョゴリ (1990)	31	III 1990.8.9 北西壁下部初登攀
	4		今 田 賢 次	ガッシャーブルム II	21	1980.8.2 日本人初登頂
	6		三 樹 昇	チョー・オユー (1996)	35	
	8	f	坪 佐 圭 子	チョー・オユー (1997)	38	
	9		小 塚 和 彦	チョモランマ (1999)	39	
	9		大 谷 亮	カンチェンジュンガ C	24	1984.5.17 日本人初登頂
	10		内 山 栄	ブロード・ピーク M	37	旧姓・岩崎 (1997)
	10		坂 本 正 治	ローツェ (1997)	37	II
	12		橋谷田 弘 仲	チョー・オユー (1995)	35	
	12		山 本 宗 彦	ブロード・ピーク M	25	III (1985)
1950年代 = 129 [内女性10人] 山岳での死亡 = 14人 [内女性0人]						
1960	2		岩 崎 洋	ブロード・ピーク M	37	(1997)
	2		倉 橋 秀 都	シシャパンマ C (1994)	34	IV
	2		東 秀 訓	チョー・オユー (2002)	41	
	2		望 月 泰 彦	ナンガ・パルバット	33	(1993)
	3		片 山 貴 寛	ガッシャーブルム I	30	(1990)
	3		花 田 博 志	ナンガ・パルバット	25	II (1985)
	5		加 藤 智 二	ガッシャーブルム II	25	II (1985)
	6		高 村 真 司	シシャパンマ C (1989)	28	
	7		小 野 岳	マカルー (1995)	34	II 東稜下部
	9		増 田 隆	シシャパンマ C (2001)	41	
	9	f	池 上 由 紀	チョー・オユー (1992)	32	旧姓・佐藤
11		柳 原 武 彦	チョー・オユー (1992)	31		
1961	1		田 辺 治	ガッシャーブルム II	29	IX (1990)
	2		古 野 淳	チョモランマ (1995)	34	1995.5.11 北東稜初登攀
	3		古 関 正 雄	ダウラギリ I (1993)	32	
	4		江 塚 進 介	ブロード・ピーク M	32	V (1993)
	4		佐 藤 光 由	サガルマータ (1985)	24	III
	5		安 川 誠 二	チョー・オユー (1996)	35	
	7		斎 藤 明	マナスル (2001)	40	
	7		吉 村 哲 明	ブロード・ピーク M	29	(1991)
	8		増 田 徹	チョー・オユー (1996)	34	
9		青 黄 靖	チョー・オユー (2000)	38		

生年	月	日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
1961	10		春木俊秀	ローツェ (1986)	24	IV (1991)
	11		鈴木正典	シシヤパンマC (2003)	41	
	12		戸高雅史	ナンガ・バルバット	28	
	?		倉岡裕之	チョー・オユー (2003)	42	
1962	1		高井正成	シシヤパンマC (1990)	28	2000.2 大雪山死亡 西壁上部 VI (1999) II 1991.10 ナムチャ・バルワ雪崩死亡 (1988) VI (1995) 北東支稜 (1991) VII
	1	f ×	藤堂多恵子	チョー・オユー (1996)	34	
	3		中島明	K 2 (1997)	35	
	3		小西浩文	シシヤパンマC (1982)	20	
	3		中山茂樹	シシヤパンマC (1990)	28	
	4		清野嘉樹	ナンガ・バルバット	37	
	5		池田憲一	チョー・オユー (1995)	33	
	5	×	大西宏	サガルマータ (1989)	27	
	6		海野雅之	カンチェンジュンガM	26	
	6		近藤謙司	チョー・オユー (1987)	25	
	8		月原敏博	シシヤパンマC (1990)	27	
	8		北村俊之	ブロード・ピークC	32	
	9		小田隆三	カンチェンジュンガM	28	
10		山本篤	シシヤパンマM (1988)	26		
1963	1		井本重喜	チョー・オユー (1994)	31	II
	1		棚橋靖	チョー・オユー (1990)	27	II
	2		笹原慎治	チョー・オユー (1994)	31	
	5		片山右京	チョー・オユー (2001)	38	II
	7		阿部訟二	チョモランマ (1998)	34	
	7		松本政英	ブロード・ピークM	36	(2000)
	8	×	佐藤正倫	ナンガ・バルバット	26	III (1990) 1993.10.18 トゥインズ死亡
	8		沢田石順	チョー・オユー (1995)	32	
	10		角谷道弘	チョー・オユー (1997)	33	
	11		林雅樹	ガッシャーブルムI	32	(1996)
	12		山田良二	K 2 (1997)	33	西壁上部
	1964	3		小野奨造	ガッシャーブルムII	33
3			稲葉英樹	ガッシャーブルムI	30	II (1994)
5			米山悟	ガッシャーブルムII	34	(1998)
5			林本章	チョー・オユー (1992)	28	
5			三村雅彦	マナスル (1996)	32	
7			増永広樹	チョー・オユー (1996)	31	
8		×	野沢井歩	ダウラギリI (1993)	29	II 2003.10.2 ヒムルン・ヒマール死亡
10			斉藤順二	ブロード・ピークM	23	(1988)
10			三野和哉	ブロード・ピークM	28	(1993)
12			中島俊弥	ダウラギリI (1991)	26	II
1965	3		松原尚之	マカルー (1995)	30	II 1995.5.21 東稜下部初登攀
	3		新野泰之	ガッシャーブルムII	32	(1997)

生年	月	日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
1965	3		九里徳泰	チョー・オユー (2001)	36	II
	3		上村博道	チョモランマ (1998)	33	
	4		山野井泰史	ブロード・ピークM	26	IV (1991)
	5		後藤文明	チョー・オユー (1993)	28	VI
	6		小林正己	K2 (1997)	32	西壁上部
	6		松本伸夫	チョモランマ (2000)	34	
	6		×石坂工	マカルー (1991)	26	1991.10.8 登頂後帰路疲労凍死
	7		武田澄人	ダウラギリ I (1994)	30	
	7		高畠聡	チョー・オユー (2000)	34	II
	7		f高橋留智亜	チョモランマ (2000)	34	
8		f高橋尚子	チョー・オユー (1999)	34		
8		原田暁之	マナスル (1997)	32		
9		矢部幸男	ナンガ・バルバット	29	1995.7.23 北面新ルート初登攀	
10		×小林俊之	アンナプルナ I (1987)	22	1987.12.20 冬期南壁初登攀後帰路死亡	
1966	1		f遠藤由加	ナンガ・バルバット (88)	22	A P IV
	6		工藤寛	ダウラギリ I (1998)	32	II
	7		寺山元	チョー・オユー (2000)	33	
	8		鈴木理裕	チョー・オユー (2000)	33	
	8		田村真司	チョモランマ (2002)	41	II
	9		宇佐美栄一	チョー・オユー (2001)	35	II
	9		奥田仁一	カンチェンジュンガM	31	II 北壁
	9		f後藤あずみ	シシャバンマC (1990)	23	旧姓・白沢
	12		三好学	チョー・オユー (2001)	34	
	12		中村貴士	ブロード・ピークM	26	(1993)
1967	1		熱田渉	サガルマータ (1994)	27	南稜
	2		北村誠一	ガッシャーブルム II	34	(2001)
	3		広瀬学	マナスル (1997)	30	
	3		鈴木幹夫	K2 (1997)	30	III 西壁上部
	3		花谷泰広	チョー・オユー (2001)	34	
	3		f恩田真砂美	チョー・オユー (2002)	35	
	5		山根智之	ガッシャーブルム I	23	西稜末端 (1990)
	5		長見重能	チョモランマ (2002)	35	
	5		横山浩二	ダウラギリ I (1990)	24	
	6		谷川太郎	ブロード・ピークM	24	VIII
	7		f柏澄子	チョー・オユー (2002)	35	
	11		×星野龍史	チョー・オユー (1993)	25	V 2001.10 ダウラギリ I で行方不明
	12		内田健一	ブロード・ピークM	25	(1993)
12		f続素美代	チョー・オユー (1992)	24	III	
1968	2		銅谷実	ローツェ (1999)	31	
	2		×品川幸彦	ガッシャーブルム I (97)	29	II 2001.10 ダウラギリ I で行方不明
	2		寺田勉	チョー・オユー (1993)	25	

生年	月	日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
1968	2		杉山敏康	マナスル (1996)	28	II 1998.5.16 カンチMで転落死亡 III 1995.7.23 北面初登攀 (1997) (1997) II (1997)
	4		×赤坂謙三	K2 (1996)	28	
	4		星野秀樹	シシャパンマC (1995)	27	
	7		澤田実	ダウラギリI (1995)	27	
	10		秋山武士	ナンガ・バルバット	26	
	10		平岡竜石	ナンガ・バルバット	28	
	11		有川博章	マナスル (1996)	27	
	11		木村功二郎	ガッシャーブルムI	28	
12		f大久保由美子	ガッシャーブルムII	28		
1969	1		藤田耕史	シシャパンマC (1990)	21	II (1999) (1996) IV (1993) 28 30 32 31 II 27 II 1997.7.19 西壁上部初登攀 旧姓・村田 24
	2		森真平	ナンガ・バルバット	30	
	3		川奈部隆之	ガッシャーブルムI	27	
	4		長久保浩司	ガッシャーブルムII	24	
	4		前田勝司	チョー・オユー (1997)	28	
	6		剣持典之	シシャパンマM (1999)	30	
	8		大谷日佐夫	チョー・オユー (2001)	32	
	8		三浦豪太	チョー・オユー (2002)	31	
	9		中川邦仁	K2 (1997)	27	
	10		高橋玲司	シシャパンマC (1999)	29	
	10		服部文祥	K2 (1996)	26	
11		田端宏好	チョー・オユー (1994)	24		
1960年代=125人 [内女性10人] 山岳での死亡=8人 [内女性1人]						
1970	1		広瀬健太	カンチェンジュンガM	28	III 北壁 (1998) II N~C~M縦走 (2001) 28 II 1998.5.16 カンチMで高山病死亡 28 III (1993) 28 23 (1993) 30
	1		服部徹	ブロード・ピークC	25	
	2		小林和久	ガッシャーブルムII	31	
	3		杉山敏彦	ダウラギリI (1998)	28	
	6		×椎名厚史	K2 (1996)	26	
	6		下間洋司	ダウラギリI (1998)	28	
	8		吉田裕一	ガッシャーブルムII	22	
	9		諸岡慶太郎	チョー・オユー (1998)	28	
	9		秋山剛	チョー・オユー (1993)	23	
	9		辻信広	ブロード・ピークM	22	
	12		野高健司	シシャパンマC (2001)	30	
	1971	1		竹内洋岳	マカルー (1995)	
1			加藤博	シシャパンマC (1999)	28	
3			唐橋芳和	ガッシャーブルムI	25	
7			宮川仁一	チョー・オユー (1995)	24	
11			荒井俊彦	マカルー (1995)	23	
1972	1		上田恵爾	ダウラギリI (1995)	23	(1997)
	5		仕立亮一	ダウラギリI (2001)	29	
	5		綿貫剛	ブロード・ピークM	25	

生 年	月	日	氏 名	最初に登頂した山	年齢	備 考
1972	5		大 谷 篤	ナンガ・バルバット	25	(1997)
	6		佐々木 穂 高	ガッシャーブルム II	29	(2001)
	7		萩 尾 雄 二	チョー・オユー (1995)	23	
	8		f大 窪 三 恵	チョー・オユー (2002)	30	
	10		×佐 野 崇	K 2 (1996)	23	1998.5 鹿島槍で雪崩死亡
	11		佐 野 友 康	ガッシャーブルム I	21	(1997)
1973	2		原 田 智 紀	チョー・オユー (1994)	21	
	4		f足 立 道 代	チョーオユー (2002)	29	
	5		上 岡 鋼 平	ガッシャーブルム II	26	(1997)
	8		早 川 敦	ガッシャーブルム II	27	(2001)
	8		野 口 健	チョー・オユー (1996)	23	II
	10		高 橋 和 弘	K 2 (1996)	22	VI 南南東稜
	10		中 村 和 貞	チョー・オユー (1999)	25	II
	12		×福 本 誠 志	ブロード・ピークM (97)	25	II 2001.5 ダウラギリ I で行方不明
1974	1		千 田 敦 司	シジャバンマ C (2003)	29	
	3		f高 橋 早 映	ダウラギリ I (2001)	27	
	8		豊 嶋 匡 明	マナスル (1997)	23	
	11		重 川 英 介	チョモランマ (1995)	21	
1975	2		岩 下 頼 人	ガッシャーブルム I	23	(1997)
	4		森 章 人	ガッシャーブルム II	26	(2001)
	7		関 裕 一	マナスル (1997)	22	
1976	1		加 藤 慶 信	マナスル (1997)	21	V
1977	2		田 島 崇 行	ガッシャーブルム II (97)	20	日本人八千m最年少登頂
	2		天 野 和 明	ガッシャーブルム II	24	(2001)
	6		石 川 直 樹	チョモランマ (2001)	23	
			大河内 宏 幸	チョモランマ (2003)	26	
			飯 塚 公 知	ガッシャーブルム II	26	(2003)
1979	2		谷 山 宏 典	ガッシャーブルム II	22	(2001)
	5		山 田 淳	チョー・オユー (2001)	22	II
	5		平 出 和 也	チョー・オユー (2001)	22	
	11		大 内 明 弘	チョー・オユー (2001)	21	
1970年代=50人 [内女性3] 山岳での死亡3人 [内女性0人]						
1980	2		松 本 浩	ローツェ (2002)	22	
1982	10		山 村 武 史	サガルマータ (2003)	26	日本人エヴェレスト最年少登頂
1980年代=2人 [内女性0] 山岳での死亡0						

(注) 生年月日欄の「?」は年齢によって推定したので前後に変更される可能性もある

登頂者総合計		1950年代		123 ( 10)		山岳遭難者		14 ( 0)	
1910年代	1 ( 0)	山岳遭難者	0 ( 0)	1960年代	125 ( 10)		8 ( 1)		
1920年代	2 ( 0)		0 ( 0)	1970年代	50 ( 3)		3 ( 0)		
1930年代	35 ( 6)		3 ( 0)	1980年代	2 ( 0)		0 ( 0)		
1940年代	86 ( 14)		12 ( 2)	総合計	430 ( 43)		40 ( 3)		

神秘の地チベットへ、幻の花「ブルーポピー」を見に行こう！

## HAJニンチン・カンサ トレッキング隊員募集

HAJがこれまで過去4回サマーキャンプを実施したニンチン・カンサBCへのトレッキングです。ラ薩(ラサ)の街を俯瞰したり、チベット仏教の聖なる湖ヤムドクツォを眺望し、夏の高原をトレックしながら幻の花ブルーポピーや咲き乱れる小さく可憐な花々との出会いを楽しみます。

現時点でフライトスケジュールが未定のため日程は変更になる公算が大了。

○料金：435,000円 ○募集人員：15名限定(最少催行人員10名) 定員になり次第〆切

○HAJのツアーリーダー同行 ○問い合わせ先：HAJ事務局

### ○日程概要

1. 7月18日 成田～成都 空路四川省の成都へ 峠を越え、マヨン村からBCまでトレック
2. 7月19日 成都～ラサ 空路チベットのラサ
3. 7月20日～21日 ラサの観光と高所順応
5. 7月22日 ラサ～ランカーズ ジープにてニンチン・カンサを眺めながらヤムドク湖の麓ランカーズへ移動
6. 7月23日～24日 ランカーズで高所順応
8. 7月25日 ランカーズ～BC ジープでカロ
9. 7月26日 BC付近でブルーポピーなど高山植物の観察と氷河湖探索、小ピークへも可能
10. 7月27日 BC～ラサ 往路を戻ります
11. 7月28日 ラサ～成都 国内線にて成都へ
12. 7月29日 成都 市内観光とショッピング
13. 7月30日 成都～成田 空路帰国の途へ

## ■ 寸 感 ■

今やヒマラヤ登山の世界は、受入れ国側の規制緩和が進み、相手国の登山規制を知らなくとも8千メートル峰登頂者となる事が出来る。そのため「研究会」などは不要となった。

同じことが「高山病」や「雪崩」にもあてはまるのだろうか。否そうではあるまい。その知識や経験なくして身を守ることはできるまい。(山森)

- 25日(日) 新日本ヒマラヤ会議・東京 於、労働スクエア(参加者78名)
- 26日(月) 東京集会(16名)
- 28日(水) 白川義員「猪突猛進会」於、ホテルパシフィック東京(山森)
- 30日(金) 日本山岳ガイド協会新年懇親会 於、弘済会館(山森)
- 31日(土) 野沢井歩前専務理事合同追悼会 於、かんぼヘルスプラザ東京(180名)

## 事務局日誌(1月)

- 6日(火) 仕事始め
- 9日(金) ヒマラヤ387号発送
- 13日(火) CMAへ「K2登頂者」リスト送付
- 17日(土) 日山協新春懇談会 於、ガーデンパレス(山森)
- 21日(水) 山岳4団体「登山調査用紙実務者会議」於、ルーム(山森)
- 23日(金) 新日本ヒマラヤ会議・東京用資料作成作業

## ヒマラヤ No.388 (3月号)

平成16年2月10日印刷 16年3月1日発行

発行人 山森欣一

編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

# 遙かなる高みへ



トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～

◆格安航空券のご相談は◆  
**キャラバンデスク**  
 (東京) ☎03(3237)8384 (直通)  
 (大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本社 / 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1  
 岩波書店アネックス5F  
 ☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396  
 ■大阪営業所 / 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F  
 ☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員  
 西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp) お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル ☎0120-811395 (通話料無料) をご利用下さい。

## 東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中ビル6F  
 TEL: (03) 3595-4830 (代) http://www.tokyo-np.co.jp/tbook

山書散策	登山の運動生理学百科	中・高年登山なんでも百科	新・山靴の音	女性ガイドのしなやか登山術	新・山の雑学ノート・第1集	すぐ役立つ 中・高年の雪山入門	すぐ役立つ 山のメモ帖	すぐ役立つ 記念日の山に登ろう	すぐ役立つ 山の気象と救急法	北アルプス編	山小屋の主人の炉端話	最新 クライミング技術
今まで数多く発行された山書。何を読んだらよいか、そんな時の指針として――「登山」連載時から好評。	「どうしたら合理的で安全な登山ができるのかを、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。	「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむよう、中・高年登山の成の書。	還暦をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。	常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける女性登山ガイドのユニークな登山講座。	山での話題が登った山の数だけではない。また、豊富な雑学が登山をも楽しくより安全にしくれる。	低山から夢のヒマラヤまで……。トピクルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しもう。	「岳人」連載の「山の雑学ノート」から話題の話題を取り上げた、山のワケを深め、安全登山の指針となる冊。	人それぞれの記念日の日付と標高が致する山はどこと。	山の気象遷移を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。	北アルプス編を代表とする77のルートを紹介するすぐ役立つ「ルート案内書」。	著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取っつき話。	ジム・アレンのフリークライミングからボルネオ、アルパイン・クライミングまで、すべてのクライマーに必須の「山」の技術を網羅する「クライミング」ではなく、その意味や選択基準などを詳しく解説。実践的なクライミングのヒント、心構えなども細かく紹介。
河村正之 著	山本正嘉 著	福島一正 著	芳野満彦 著	樋口英子 著	岳人編集部編	福島正明 著	岳人編集部編	石井光造 著	飯田睦治郎 著 桜井博幸 著	廣川健太郎 著	工藤隆雄 著	菊地敏之 著
1500円	2000円	1500円	1262円	1500円	1400円	1600円	1400円	1300円	1359円	2500円	1500円	1600円

※本体価格に消費税が加算されます。

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



## Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
- 新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
- 神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(クイビル2F) ☎03-3295-0622
- 神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
- 八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
- 大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
- 高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
- 川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
- 甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
- 宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
- 太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
- 松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
- 長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
- 新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

- 新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
- 仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
- 秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
- 盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
- 札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
- 北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
- 伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
- 平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
- 外商部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



### ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004